

# 進取の気性と地域愛の発信で取り組む コンパクトでスマートなまちづくり

なみき しん  
並木 心  
羽村市長

## 小規模太陽光発電で挑む 全国初の試み

平成28年10月半ばの取材当日の朝、羽村市には小作おさく駅から入った。羽村市内の鉄道駅にはJR青梅線・羽村駅と小作駅の2つがある。市役所は両駅のほぼ中間で、少し羽村駅寄り  
に位置している。本来なら羽村市の玄関口・羽村駅から入るのが順当だが、ちょうどその時間に小作駅から市役所方面に向かって出るコミュニティバスに乗りたかったのだ。そのコミュニティバスは日本で初めて路線バスの実用運行車両として投入された小型電気バス「はむらん」(平成24年)。コミュニティバス・中央コースで運行)である。

羽村市では平成27年12月から、庁舎屋上に設置した太陽光発電施設から得られる電力を活用し、小型電気バス「はむらん」を運行させる「AZEMS(エイゼムス)CO<sub>2</sub>ゼロのスマー

ト交通システム」事業も開始している。前述のように路線バスに小型電気バスが使われたのは「はむらん」が日本初の事例だが、AZEMSのような規模の小さい太陽光発電によるスマート交通システムそのものも、全国初の試みとして関係各方面からの注目を集めている。

小作駅から羽村市役所まで5分間の乗車体験ではあったが、静かで滑らかな乗り心地は非常に快適だった。運転手さんの話では車重がディーゼル車より重く、ハンドル操作に慣れが必要なものの、慣れれば挙動もスムーズで運転しやすいという。ちなみに小型電気バス「はむらん」は、羽村市内に大規模工場を持つ日野自動車の開発によるものだ(※羽村市コミュニティバスで運行されている小型電気バスは1台。ほかはディーゼル車でこれも呼称は「はむらん」)。

これまでコミュニティバス路線を各地で体験してきた。だが乗り心地の良さの实感として、これは確かに出色のレベルだと納得され

る。またコミュニティ

バスの利用者は通学時の学生と高齢者が中心のイメージがあるが、羽村市では若い主婦や通勤客など、働き盛りの世代もコミュニティバスを日常的に活用している。その様子がわずか5分間の体験でも垣間見られたのが、非常に印象的だった。

「地域の貴重な雇用のある地元企業とのコラボで、たまたま全国初の試みということになりましたが、太陽光発電でコミュニティバスを走らせる事業は、そもそも地域の面積が狭く、比較的坂道が少なく、まっ





市庁舎の屋根で蓄えられた電気を活用するAZEMS事業

すぐで平坦な道路の多い羽村市の地域特性に  
びつたりです」

そう語るのは並木心・羽村市長である。  
羽村市の庁舎屋上（2棟）には計190枚  
の太陽光発電パネルが設置され、年間平均  
5万6296kw/日の電力がつけられる。「は  
むらん」（小型電気バス1台分）の運行に使わ  
れるのはそのうちの約40%で、60%は市役所  
内の消費電力の一部に使われているほか、一  
般の電気自動車向けの急速充電器が庁舎裏の

駐車場に設けられ、無料開放さ  
れている。

急速充電器は「災害などの非常  
時にはスマートフォン充電用  
にも使える」（並木市長）そうで、  
このシステムのフル稼働によつ  
て市役所の年間電気料金約  
137万円分が節約されるとと



路線バスでは日本初の小型電気バス「はむらん」

もに、CO<sub>2</sub>の削減量は年間31t近くに達する。  
付随して予測される各種の波及効果も含めれ  
ば、将来的に年間約100tのCO<sub>2</sub>削減が可能  
とも試算されている。

小型電気バスの開発や新交通システムの構  
築で地元企業とのコラボがあったとはいえ、  
羽村市があえてこのような事業を行うに至っ  
た動機はいつたい、どのようなことだったの  
だろうか。

### 進取の気性が横溢する歩み

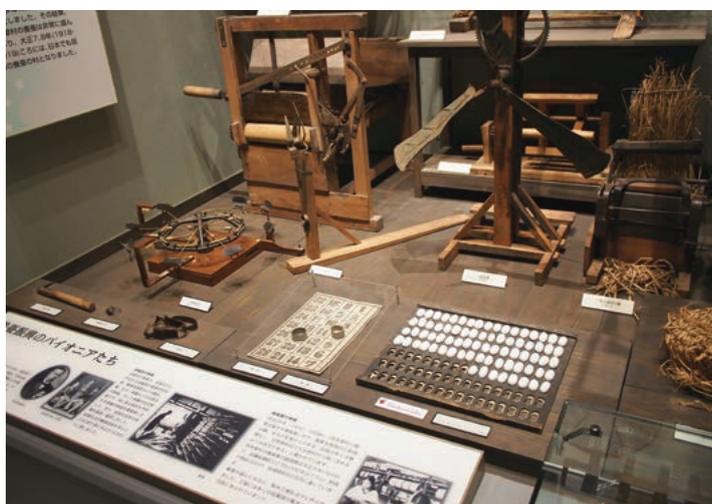
その質問に対し、並木市長からは「CO<sub>2</sub>ゼロ  
のスマート交通システムを導入することに  
は、環境面での実際の効果や市民の意識改革  
などさまざまなメリットが考えられます。確  
かに1億円近い初期投資（3分の2は国の補  
助）の問題があります。羽村市がどうしても



米作り・チューリップ作りを通した市民交流の場「根がらみ前水田」の春

今すぐやらなければならぬ事業というわけ  
でもない。でも地元企業との連携で、少なく  
ないメリットもあり、同時に全国初の試みに  
チャレンジできる好機が目の前にあるのな  
ら、やはりこれはやるべきだろうと。その心  
境を一言で表現しますと、羽村の地で先人た  
ちが昔から培ってこられた《進取の気性》の発  
露、そこに行き着くのではないかと思いま  
す」との答えが、笑顔とともに返ってきた。

では、「進取の気性」は羽村市ではどのよう  
に培われてきたのだろうか。一つのヒントを  
与えてくれるものが今も現役で稼働する「玉  
川上水」だ。玉川上水は、江戸時代初期の承応



羽村の歴史を概観できる羽村市郷土博物館(写真は養蚕業の展示)



市民の憩いの場・羽村市動物公園



武蔵野台地上の古い形態である「まいまいず井戸」(五ノ神社境内・東京都指定史跡)

2年(1653年)、江戸市中への給水のために開削され、庄右衛門・清右衛門兄弟(多摩川沿いの地域出身とされるも正確な出身地は不明)の指揮監督により、羽村の取水堰から四谷大木戸(新宿区四谷)の水番所(江戸市中への配水拠点)まで約43kmを8カ月程度の工期で完成させたといわれている。兄弟は、その功績により、幕府より玉川の姓を与えられた。

羽村には多摩川から上水に水を引き込むための取水堰が設置され、管理のための陣屋が置かれた。ここには江戸の役人たちが行き来し、水番人として地元の農民が管理を請け負った。

「取水堰を設ける候補地はいくつかあったよ

うですが、玉川兄弟はあらゆる角度から検討し、最終的に羽村を選んだ。それが1年にも満たない期間で工事を完遂する、最大のポイントとなったといわれています。そして、陣屋の役人たちと地元の人たちが直接かわりを持つことができた。この関係が、後々の羽村人に与えた影響は大きいと思います。玉川上水の管理で養った企業性が、明治期の指導者たちに進取の気性となって発露したんです。進取の気性は多摩地区全般の歴史に垣間見られる特色ですが、羽村市では、江戸時代から連綿と受け継がれてきた文化ともいえるべき「進取の気性」という文言を、『市民憲章』にも盛り込んでいます(並木市長)

確かに、羽村は明治期の西多摩地域で大きな存在感を示す。養蚕しかり、青梅鉄道しかり、教育しかり。

身近かつユニークな事例では、羽村市動物公園の存在がある。面積4.2haの小ぢんまりした動物園だが、市民の憩いの場として高い人気を誇り、市制施行(平成3年)以前の昭和53年に、日本初の町立動物園として開園した輝かしい歴史を有している。

ちなみに羽村市動物公園の敷地は戦後の一時期(昭和34年〜46年)、米軍横田基地に勤務する米軍人子弟のための横田アメリカンスクール分校だった。立川市・昭島市・福生市・武蔵村山市・瑞穂町とともに今も横田基

# 羽村市

市 政 ル ポ

(東京都)



豊かな田園も羽村の象徴(上段は小学生の田植え体験)

地(在日米軍司令部および第5空軍司令部が所在)のあるまち・羽村市にとって、戦後の歴史の一コマを語る場所でもあるのだ。

羽村市はルポ取材の約2週間後、平成28年11月1日に市制施行25周年の節目を迎えた。そして平成30年11月1日の市制施行とともに制定された市民憲章には、「先人の進取の気性と英知によって築かれたこの郷土を受け継ぎ、温かい心のかよいあうまちづくりを目指す」と宣言されている。

市制25周年の節目を迎えた今年度の羽村市においても、前出AZEMS事業だけでなく、進取の気性と英知を結集した新たな試みが開始された。平成27年9月策定の「羽村市長期人口ビジョン及びまち・ひと・しごと創

生計画」を受ける形で、今年度から設置されたシテイプロモーション推進課を軸に展開されている、羽村市の魅力発信事業「はむら家族プロジェクト」が、その代表的な事例だ。

## あるがままの魅力を発信

羽村市は平成3年の市制施行以前、昭和31年の旧羽村町発足の時点から近年まで、人口を常に増やし続けてきた。また明治22年の町村制施行の際の3村合併で前身の西多摩村が発足して以降、昭和31年の羽村町への移行時にも、平成3年の羽村市への移行時にも他の地域と合併することなく、現在まで同一の市域の中で都市的發展を遂げてきた。そして

昭和37年の首都圏整備法による市街地開発区域の指定を受け、土地区画整理事業による基盤整備を積極的に行ったことで、それまでの農村地帯に工場誘致を行い、住宅建設を積極的に実施することで、近代的な都市基盤の基礎を確立した。

その結果として実現したのが、交通至便で、農業地区と工業地区、住宅地区とがバランスよく調和した職住近接の近代都市でありつつ、多摩川を中心軸とする豊かな自然環境をも濃厚に残した、現在の羽村市の優れた都市的環境である。

その間の財政状況もおおむね良好で、例えば市制施行後25年間で普通交付税の交付団体となった年度は8回だけだ(平成12〜14年度、同22〜26年度)。羽村市が現在進めるシテイプロモーションは、このような経緯で培われてきた羽村市の暮らしやすさ、働きやすさ、子育てのしやすさなどのポジティブな諸要素を包含した形を《はむらスタイル》と命名し、それを前面に打ち出した魅力発信事業である。

「人口については市制施行時(平成3年)の約5万3000人から、ピークとなった平成22年度の約5万8000人に至るまで、ずっと緩やかな右肩上がりが続けていましたが、その後は緩やかな減少に転じています。また工業化の推進で、税収面における法人税の占める比率が必然的に高まっていきましたが、現状は一部企業の占める法人税比率が大き過

ぎるなどの課題があります。市制施行の少し後から一貫して断行してきた、多角的な行財政改革などの効果もあり、おおむね不交付団体を維持してきたものの、そういう意味ではバランスを少し欠いた状態にあるともいえます。しかし市民へのアンケート調査を見ても、20年間以上住んでいる市民が全体の60%以上、居住10年以上の人を合わせると80%を超えるなど定着率がかなり良く、地元への愛着度も非常に高いという結果が出ている。これは本市の強みだと考えております」(並木市長)

並木市長はさらに、「より多くの子育て世代に転入して来てほしい気持ちは、もちろん大いにありますが、羽村市の都市としての規模や、地域に強い愛着を持つ方たちが多いという市民意識なども考慮すれば、羽村市におけるシテイプロモーションでは、新住民を大げさな謳い文句で呼び込むようなことはしたくない。実際に羽村市ライフを満喫している市民の皆さんの様子を、市民自身の言葉で紹介するとか、暮らしぶりをそのまま発信するというような形で行いたい」とする。

### 市民協働で構築目指す「未来の形」

そうした姿勢はシテイプロモーションの主要事業である「はむら家族プロジェクト」という事業名に如実に表れている。市長の言葉にもあるように、地域での家族の暮らしぶりの



羽村取水堰(上段)と多摩川から分流した直後の玉川上水

素直な発信が、羽村市の魅力そのものの発信、知名度の向上にもつながるといふ発想だ。この姿勢こそが羽村市のシテイプロモーションの独自性であり、すなわち「はむらスタイル」なのだ。そのような観点から既に実施されているプロモーション事業には、次のようなものがある。

◇プロジェクト①「羽村市のお気に入りの場所

所で家族写真を撮影しよう」／市内在住の子育て家族20組を公募し、お気に入りの場所プロカメラマンが家族写真を撮影。同時にお気に入りの理由、羽村市のいいところについてのインタビューやアンケート調査なども実施。

◇プロジェクト②「はむらのここが好き!

羽村市の魅力をみんなで集めるワークショップ」／羽村市の住みやすさ、子育てのしやすさを参加者が探し出すワークショップを開催した。

◇プロジェクト③「はむらを楽しむ家族のポスター展」／前記①で撮影した「家族写真」をポスターにして展示し、羽村市の魅力を広く発信した。

こうしたプロモーション事業の模様は市の広報紙や公式PRサイト(転入・定住促進、子育て支援を目的に市の魅力や子育て世代が必要とする情報をワンストップで発信)などに掲載されるほか、子育て世代に読者の多い雑誌「たまごクラブ・ひよこクラブ」にも、羽村市の暮らしの魅力を盛り込んだ記事を6回

# 羽村市

市 政 ル ポ

(東京都)



2015年から始まった「はむらイルミネーション」(小作駅前・10月)



イルミネーション期間中に開催される「はむらういんパーティー」(ハロウィンイベント)

ることで、広域連携や市民スポーツ振興、市民の健康づくり、文化芸術の振興や来訪者やさしいまちづくりなど、さまざまな観点からの活性化の契機になるとも私たちはとらえています」(並木市長)



ふるさと祭りでも活躍した羽村市の人気ゆるキャラ・はむりん

連続で掲載中だ(平成28年10月号〜平成29年3月号)。  
また公式PRサイトでは、市民と連携した魅力の発信として「魅力発信市民記者」を公募し、取材と執筆に当たってもらっている。公募と同時に外部講師を招聘し、企画立案からインタビューの方法、記事の作り方の講座を開設するなど人材育成システムも整っており、今後の展開が楽しみだ。さらに今年度からはまちづくりに関する「市民提案型事業」も始まり、既に3件の採用事業が採択されている。「はむら家族プロジェクト」に加え、今後こうしたまちづくりの観点から、市民参加

による魅力発信活動が活発化すればより効果的だろう。

ここでもう一つ、羽村市の取り組みで注目したいのは、やはり今年度開設の「東京オリピック・パラリンピック準備室」の存在だ。2020東京オリ・パラに関しては、競技場問題などがハッキリしないこともあり、東京の自治体の協力体制も現状では温度差があるようで、羽村市のように専門部署を設置した例は意外に少ない。

「多摩地区が競技開催地になる可能性はほとんどないでしょうが、何らかの競技が来るようなら羽村市でなくとも盛り上げに協力したいですね。またそれとは別に、東京都の掲げる『次世代に誇れるレガシーの創出』という方針には共感します。そうした気運を共有す

準備室の活動は緒に就いたばかりだが、そうした羽村市の柔軟な姿勢は、世の動きに向けたアンテナ感度の良さを感じさせる。同時にアンテナ感度の良さは、並木市長が常に市政運営の理念としてきた「ひとに心 まちに風」という文言のもつ爽やかさにも通じるように思われる。まちに暮らす誰もが心を大切に、支え合い、行政と市民が連携・協働しながら常に新しい時代の風も取り入れていく」。そんな清新なまちを築きたいとの願いの込められた「ひとに心 まちに風」とは、まさに市民による強い地域愛と進取の気性の発信を旨とする、羽村市のシティプロモーションのココロそのものでもあるだろう。

(取材・文 遠藤隆／取材日 平成28年10月14日)